

# 信 毎 歌 壇

## 米川 千嘉子 選

九十四の母動くまで動かずに寄り添ひ眠る五歳の  
 牡犬 (長野市) 伊藤 恵子  
 大学生の息子をバイトで賤けくれし鍋金酒店おほ  
 あさん返く (千曲市) 関 津和子  
 霜柱サクサク踏んで早朝に洗濯もの干せばモルゲ  
 ンロート (飯島町) 酒井千代美  
 新年に老親は誓ふ真剣に喧嘩するとも長引かせぬ  
 と (千曲市) 中村 美樹  
 「どこへ行くの?」 「ブルーライトヨコハマ!」  
 駅のホームで三歳の娘は (麻績村) 塚原ふじ子  
 一斉に銃向けられし溪谷の月の輪熊や後ずさりた  
 る (小諸市) 加藤 陽介  
 西藏の山より生れる風のこどしショート動画の次々  
 流る (松本市) 堀内 悠子  
 前髪のすき間より見る朝の色見たくないもの拾わ  
 れよう (大町市) 丸山めぐみ  
 「お前は血の繋がりは無いんだよ」 涙ながらの  
 養母に頷く (長野市) 松本 博人  
 もみじマークの吾を六台追い越せど楽しんで行く  
 冬陽炎を (上田市) 小林さよ子

佳作  
 久々に入りし書店におどろきぬ新刊古本文具売り  
 おり (駒ヶ根市) 塩沢 春子  
 言葉には恐ろしいほどハワーがある相手のいいと  
 ころをほめて生きたい (千曲市) 荒井よし子

第一首、母に寄り添う犬の様子が微笑ましい。「目を覚ますまで」ではなく、「動くまで」としたのもいい。第二首、商店の名前がどっしりして魅力的。昭和の人情によく合っている。第三首、モルゲンロートは朝焼けであたりが染まること。山とか空という語を使わずに想像させる。第四首、同居している老親の新年の言か。リアルだが、老親にこの自覚があるのはなかなかすごいことでは。

選評

## 小池 光 選

終電の尾灯ゆらめく山坂を戦後八十年が過ぎゆく  
 (長野市) 南郷 修二  
 埋葬のカメムシの墓見ら作り十字架たてて讚美歌  
 うたふ (木曾町) 新村 亮三  
 横列に九人並んで待つバス停無言の行列スマホの  
 行列 (長野市) 松本 博人  
 人工知能の電気をあまた使ふ世となりてわが食細  
 くなりけり (長野市) 原田 浩生  
 舞い降りし重きいのちの愛おしきまは生まれぬ  
 ましらの朝に (佐久市) 高橋衣里子  
 補聴器の電池変えんと指太き大工の父は苦戦しに  
 けり (松川村) 岡 豊村  
 兵役の無き国家に生まれ来て八十歳の歩み尊き  
 (小布施町) 市村 憲彦  
 長靴に塵をは敷きて履きにけり遠き日の冬たた寒  
 かりき (飯綱町) 坂井 寿男  
 皆神山に初日がのぼる手を合わせ頭を垂れてた  
 祈るのみ (長野市) 島田 怜子  
 網を持ち今なお蝶を追いかける生物班のOB達よ  
 (長野市) 宮崎 昌

佳作  
 午年に馬一頭が逃げ出して街路駆け抜け年祝いた  
 り (松本市) 小松 久志  
 文字書かぬことで何かを失うと武道家が言う人は  
 び行く (上田市) 矢島 美穂

今回はいい歌が多かった。第一首、大きなスケールで戦後80年を歌い上げている。山坂を越える列車の尾灯が鮮やかだ。坂を越えてわれわれはどこに行くのだろう。第二首、同じことを子供のころやっ

たことを思い出し、懐かしかった。事実の記述のみに抑えているところがよい。第三首、朝のバス停の光景。みんな無言で朝からスマホをいじっている。会話は無い。さびしい限り。

選評

## 小島 なお 選

除夜の鐘を数える役を三人で数を合わせる途中と  
 最後 (上田市) 宮崎 拓男  
 問いかけにだんだん返事しなくなる人の手袋穴空  
 いており (長野市) 南郷 修二  
 「本当っすか」指圧受けつつおしゃべりするさき  
 供出した頃のこと (小布施町) 市村志津枝  
 ぐうぐうと雪を鳴かせてほんのりと嗜虐心湧  
 く清らかな朝 (塩尻市) いずみはる  
 かなづちの胡桃を叩き割る音に打ち消されゆくみ  
 づうみの波 (長野市) 原田 浩生  
 刷毛を当て障子紙貼るその下に十字架の如木杵現  
 わる (東御市) 増田 栄子  
 赤ちゃんてなくなってきた孫君にいちごのケーキ  
 を選んでおりぬ (松本市) 川久保恵子  
 浸し置き黒豆食し「かたいねえ」それはこれから  
 煮るところです (塩尻市) 丸山 葉子  
 縁の下に鳴いてる仔猫抱き上ぐるまるで紙風船の  
 如きもの (松本市) 平林 大齋  
 孫子等の去り行き広い部屋の隅トランプ一枚残る  
 は寂し (中野市) 小林かつ子

佳作  
 セーターに老猫くるみ共に老い心にたたむ日々を  
 語り (佐久穂町) 太田 春子  
 予約なき待合室の三時間は忍耐力の検査の如し  
 (箕輪町) 向山 政俊

第一首、百八つを3人で割るとひとり36。正確に数え上げるために煩悩の数に耳を澄ます3人。第二首、うつらうつらしているのだろう。まるで手袋の穴から生気がぶしゅと抜けてゆくように。第三首、戦時の資源不足のために行われた供出。食料や金属だけでなく動物も対象だった。嘘のような事実。第四首、踏みしめるたびに雪がきしんで鳴く。もっともっと、と鳴かせてみたくなる新雪。

選評